
メ～テレドキュメント「ヒバクコク」ABU賞受賞！！

メ～テレドキュメント「ヒバクコク～切り捨てられた残留放射線～」が、今年のABU (Asia-Pacific Broadcasting Union = アジア太平洋放送連合) 賞・ドキュメンタリー部門の最優秀賞にあたるABU賞を受賞しました。

11月7日、インドのニューデリーで開かれたABU総会で授賞式があり、メ～テレからは番組プロデューサーとディレクターの2人が出席しました。

ABU賞はテレビで7部門(ドラマ・エンターテインメント・子ども・青少年・ニュース・ドキュメンタリー・スポーツ)、ラジオで6部門があり、2011年度のテレビ・ドキュメンタリー部門では「ヒバクコク」など6ヵ国・7番組が1次選考を通過していました。メ～テレがABU賞を受賞するのは初めてのことです。

【受賞番組】メ～テレドキュメント「ヒバクコク～切り捨てられた残留放射線～」

(英語タイトル「THE A-BOMBED NATION」)

プロデューサー 伊藤 貴宣(メ～テレ報道局ニュース情報センター)

ディレクター 安藤 則子(メ～テレ報道局ニュース情報センター)

【放送日時】 2010年11月29日 25時59分～27時09分(70分)

【番組内容】愛知県知多市に住む甲斐昭さんは1945年8月6日、原爆投下直後の広島市に救援活動などのため駆けつけ被爆した。「黒い雨」「死の灰」などによる「残留放射線」の被爆者だ。日本政府は2008年まで残留放射線による原爆症を認めなかったため、甲斐さんは集団訴訟の原告第1号として基準の改正を求めてきた。被爆者側の勝訴が続き、政府は審査方針を改め、甲斐さんを原爆症と認定した。しかし法廷では、残留放射線の影響を否定し続けた。原爆投下から60年以上が経っても「死の灰」などによる「内部被ばく」の問題が未解明なことが背景にある。

原爆を投下したアメリカにも、核実験による残留放射線の被ばく者がいる。アメリカ政府はがんを発症した一部の被ばく者に補償をしているが、がんと放射線の因果関係を公式に認めたわけではない。世界初の核実験で、すでに「死の灰」の危険を知っていたのだが…。

日米政府は、なぜ残留放射線の影響を否定するのか？ 日米の科学者の証言や公文書などから、そのからくりを追った。

【ABU(アジア太平洋放送連合)】アジア太平洋地域の放送の発展を図るため1964年に設立された。現在、地域外も含めて58ヵ国・213の団体が加盟している。メ～テレは非加盟だが、加盟している民放連を通じエントリーした。

この件に関するお問い合わせは、こちらまでお願いします

<問い合わせ先> メ～テレ(名古屋テレビ放送)

【社長室】 浅沼・長谷川 052-322-7108